

鹿児島県立川内高等学校

校長通信

第6号 (令和8年7月14日/校長 大倉秀心)



校訓「自律 敬愛 剛健」

鹿児島県薩摩川内市御陵下町6番3号



電話 (0996) 23-7274

FAX (0996) 22-1542



可愛山同窓会

先月から今月にかけて、関東・関西・福岡の各支部の本校可愛山同窓会に、下麥同窓会長とともに参加してきました。

どの地区においても初参加の私を温かく歓迎してくださり、本校OB・OGの皆様の川内高校に対する愛情をひしひしと感ずることができました。遠く離れていても、また卒業後何年たっても、ふるさとの母校への想いは色あせていない。先輩方の想いに触れ、改めて感謝の意を強くする次第でした。

私が学校の近況報告で、生徒の皆さんの部活動や探究活動等での活躍や、学習の取組状況などをお話すると、目を細めながら嬉しそうに聞いてくださいます。後輩である皆さんが今、川内高校で高校生活を頑張っていること、そのこと自体が先輩方には嬉しくてたまらないようです。そんな先輩方を持つ皆さんは、本当に幸せ者だと思います。

先輩方からの支援

そんな先輩方を持つ皆さんは、先輩方から様々なサポートをいただいていることに気づいていますか。

例えば、皆さんが快適な環境で学習できる自習室も、薩摩川内市のふるさと納税「学校進路応援事業」を通じての多くの先輩方からの寄付金をもとに整備されています。

海外派遣事業や部活動に関わる経費の援助も生徒の皆さんにとっては大きなサポートになっていると思いますが、可愛山同窓会奨学金などは、他校ではなかなか見ることのできない恵まれた援助だと思っています。

1年生の「可愛山セミナー」においても多くの先輩方が講師として毎年人的協力をしてくださっています。

まだまだ細かく挙げれば先輩方の支援はたくさんあるのですが、皆さんには今自分が川内高校で学習や探究活動、部活動を思う存分できるのは、これまでに本校を卒業した多くの先輩方の支援があるということを忘れないでください。

キャリア教育

それぞれの地区の同窓会の懇親の場で、たくさんの先輩方とお話をさせていただきました。会話をしながら3つのことを強く感じました。

『伝統』

1番目に感じたのは伝統です。今回の会に参加されていた人の中で最もご高齢の方は80代でした。来年度創立130周年を迎える本校の卒業生ですから、80代の方がいらしても全然おかしくないのですが、80代から若い方では20代まで勢揃いすると、学校の伝統を強く感じます。ご高齢になり、歩行も不自由であるにもかかわらず、年に一度開かれるこの会を毎年楽しみにして参加してくださる先輩方がいらっしゃることを目の当たりにして、こんなにも川内高校を大切にしてくださっているのだと、校長としていくら感謝してもしきれないと思います。開会前にはこの1年間で亡くなられた同窓生への黙祷も捧げ、御陵下の同じ学び舎で学んだ仲間に対する友情を忘れず、一体感を感じることもしました。

『全国区』

今回は、関東・関西・福岡の3地区で集まったわけですが、それぞれの会に近隣の県から多くの方々駆けつけていました。この3地区以外にも卒業生がいらっしゃることを考えると、川内高校は『全国区』なのだと改めて感じます。高校卒業後、それぞれの場所で、それぞれの人生を送られている先輩方とお話すると、

その人にしか語れない人生経験を一人一人から伺うことができ、私にとって非常に有意義な時間となりました。

『多彩な職種』

お話しさせていただいた先輩方の職種も多種多様でした。土木関係・建築士・建設会社・薬剤師・保険会社・弁護士・議員・環境カウンセラー・銀行員・大学教授・ホテルマネージャー・地方行政・自動車学校経営・酒造会社・税理士・ガス会社・伝統工芸士などなど、その他多数。

高校教育現場しか知らない私としては、世の中の様々な分野について初めて知ることがたくさんあり、興味津々で話を伺うことができました。それぞれの職場で、管理職の立場、または経営者の方もたくさんいらっしゃるし、プロとしての矜持を伺うこともできました。本当に有り難い時間だったと思います。

ここで私は、それぞれの会からの帰り道で考えてみたのです。私が同窓会で先輩方と話すことにより、視野が広がったりモチベーションが上がったりするのは確かに有り難いことですが、こういう経験は生徒の皆さんこそ、した方がいいのではないかと、そう思ったのです。現役高校生の間には機会が限られているかもしれない。しかし、自分自身が卒業後、可愛山同窓会員となった後は、このような同窓会に積極的に参加して今まで出会ったことのない先輩方と出会い、多様な人生経験を伺う。これこそ「生きたキャリア教育」だと思うし、可愛山同窓会の人脈を通じて、将来の自分自身の職業へと結びつく可能性も十分ありうると思うのです。先ほど述べたとおり、川内高校卒業生は全国で多種多様な職業に就いていますから。

母校

皆さんが川内高校を卒業すると、川内高校は皆さんにとっての「母校」ということになります。

「母校」はラテン語由来の英語で "alma mater"。"alma" は「養う」「慈悲深い」「恵み豊かな」の意味で、"mater" は「母」の意味で "mother" の語源でもあるらしい。どちらにしても「母」なのですね。「父」ではない。「父校」とは言わ

ない。なぜなのか。

ちょっと調べてみると次のような説明に行き当たりました。

「母校」に「母」の字が使われるのは、学校が「多くの生徒を育み、知識や人格の基礎を養う場所」だから。漢字の「母」には「産み育てるもの」「すべての元になるもの」という意味があり、母親のように私たちを成長させてくれる存在として例えられている。

なるほど。であれば、「母国」というのも、「母なる大地」というのも合点がいきます。

皆さんは川内高校という「お母さん」の子どもたちというわけですね。となると、同窓会の先輩方は皆さんのお兄さん・お姉さんということになる。

恩送り

こう考えると、なんとなく点と点がつながり出します。先輩方が現役生の皆さんのために、労を惜しまずサポートしてくださっているのは、先に社会人になった兄・姉として、弟・妹たちに少しでも大きく羽ばたいてもらいたい、活躍してもらいたいと考えているからなのではないか、そう思えてくるのです。私が近況報告で皆さんの話をしたときに、目を細めて嬉しそうに聞いてくださる様子は、まるで年の離れたかわいくて仕方のない弟・妹たちの活躍を喜んでいるように思えてなりません。

そんなお兄さん・お姉さんからの恩を皆さんが返す手段は一つしかありません。つまり、学習や部活動、探究活動やその他自主的な活動を頑張って、希望進路を切り開き、社会に貢献できる人材になることです。先輩方がこれ以上に嬉しいことは恐らくないでしょう。

「それだけでは恩を返しきれない。様々な資金的援助も受けてきたし」という人は、卒業・就職して自分でお金を稼げるようになったときに、弟・妹たち、つまり次世代の川内高校生のために資金的援助をしてください。これを「恩返し」ではなく「恩送り」といいます。こんなことを子どもたちがしている川内高校という「お母さん」は、きっと誇らしいことでしょう。